東京を見守る教会

神田　順
（東京大学名誉教授）

建築って何だろう。新しければよいというものではない。ところが都会では、ガラスと鉄の高層ビルが次々と立ち上がって、散歩しても、まちなみなんか感じられなくなってしまう。まだ使えるビルも簡単に壊して、ただの箱のようなビルが並ぶことに、建築にかかわる人間として、社会のあり方がおかしい、建築制度そのものを考え直す時代になっているのではと思うのである。幸いここ神田界隈には、味わいのある建築がまだまだある。

このたび、機会をいただいたので、これからいくつか建築を取り上げて、少し語ってみたいと思う。まずは、駿河台の上にそびえるニコライ堂である。正式名称は、日本ハリストス正教会教団「東京復活大聖堂」という。

筆者は二〇一二年から十年ほど日本大学理工学部建築学科で教員の職を得て、すぐ南側にあった五号館に通っていたこともあり、とても馴染みのある場所ということになる。

ヨーロッパのまちを歩くと、だいたいどこのまちも、教会が最も背の高い建築で、ランドマークにもなっていて、自分の居る位置もわかって安心感を与えてくれるものだ。特に暑い日などは、まちをめぐって歩いて、教会の扉を開けて入ると、ひんやりとして汗もひき、ステンドグラスの光と色に安らぎを覚えたりするのである。

ニコライ堂は、ロシア正教なので、キリスト教の教会としては、十字平面にドーム屋根をもつ独特な形をしている。内部も含めて装

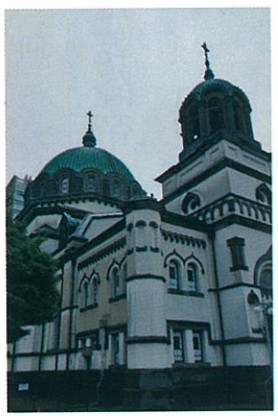
神田順　建築構造学で、東京大学教授、日本大学教授を歴任。著書に『小さい声からはじまる建築思想』（現代書館・2012年刊）他多数。

飾性が感じられる。聖堂の中は、実に多くのイコンがキリストを始め多くの聖人の姿で、会堂を取り巻いている。イコンの存在は、カソリックやプロテスタントの教会と違った、厳かな芸術的空間を演出する。ニコライ師が、明治時代の直前に、ロシアからわが国に来て、まず函館から布教を始めたと言われるが、ここ御茶の水の地に大聖堂を一八九一年に竣工させたという。設計には、わが国に建築学を持ってきた、東京大学教授のジョサイヤ・コンドルがかかわっている。

一九二三年の関東大震災を経験している。当時は鐘楼が本堂よりも高く、それが倒壊して、本堂も破損した。その後一九二九年には、岡田信一郎による復興設計で今の姿となった。本堂のドーム屋根を持ち上げて一回り大きくし、鐘楼は少し低くしたのだという。震災も、またその後の戦災も、東京のまちが壊滅状態の様子を一望した聖堂ということでもある。東京復活大聖堂の「復活」の文字は、東京を見守ってくれているということを意味するのであろうが、今後予想される震災では、もはやニコライ堂が一望することができるようなまちでなくなっている。大震災とならないことを祈るばかりだ。

今では、駅前の二十二階建て新御茶ノ水ビル、二十三階のソラシティと言ったビルに加え、日本大学も十八階のタワー・スコラ棟という、超高層ビル群でほとんど囲まれてしまった。幸いというか、ソラシティの足元の広場は、本郷通りを見下ろす位置にあって、ニコライ堂の全貌が眺められる。

本郷通りは、タワー・スコラ棟の前は、日大理工学部五号館が通りに面していたのを、今では広場になっており、さらにその南側の三井住友海上の二つの超高層ビルも広場を設けているのであるが、ニコライ堂の側には高層ビルが建っており、坂の下からの景観は、ニコライ堂はちらりとしか見られない。超高層ビルに囲まれながらも、時代を経て、歴史を刻んだ聖堂が、駿河台の都市景観を作っている。



創業100年をこえる老舗古書店
一誠堂書店
一般書・洋書・和本
千代田区神田神保町１－７　☎03-3292-0071